

『六十華嚴』の章立てに関する考察
 — 『華嚴経』諸本の章立ての相違を手がかりにして—

朴 賢珍

1 はじめに

『大方広仏華嚴経』 *Buddhāvataṃsaka-mahāvaiṣṭya-sūtra*¹ (『華嚴経』) は、複数の単独経典を編纂することによって形づくられた、いわゆる集成経典である²。経全体のサンスクリット原典は未だに発見されていない³。現在、以下の漢訳二本と蔵訳一本が全体像を伝えている。

『大方広仏華嚴経』六十巻 (以下『六十華嚴』) : ブッダバドラ *Buddhabhadra* (仏駄跋陀羅) 訳⁴, 421年訳出, 三十四章

『大方広仏華嚴経』八十巻 (以下『八十華嚴』) : シクシャーナンダ *Śikṣānanda* (実叉難陀) 訳, 699年訳出, 三十九章

Sangs rgyas phal po che zhes bya ba shin tu rgyas pa chen po'i mdo (以下『蔵訳華嚴』) : イェシェーデ *Ye shes sde* 等訳, 九世紀訳出, 四十五章

同経の原典は時代とともに発展・増広されたと考えられている。基本的には上記の三本は訳出年代の順に、より後のものが増広されているといえる。例えば『八十華嚴』には『六十華嚴』にはない「十定品」(『八十華嚴』第二十七章)が編入され、さらに『蔵訳華嚴』には『八十華嚴』にはない「如来華嚴品」 *de bzhin gshegs pa phal po che* (『蔵訳華嚴』第十一章)⁵と「普賢所説品」 *Kun tu bzang pos bstan pa* (同第三十二章)⁶とが編入されている。

以上の翻訳三本のほかに、『華嚴経』全体の構成を考察するうえで重要な資料として「大慈恩寺華嚴梵本」(以下「慈恩華嚴」)を挙げることができる。中国華嚴宗第二祖の智儼(602–668)はその著『華嚴経内章門等雜孔目』(以下『孔目章』)の中で、当時大慈恩寺に所蔵されていたサンスクリット原典である「慈恩華嚴」に言及している。彼は「慈恩華嚴」の頌の数やサンスクリットから訳した章題・「入法界品」の善知識名などを目録化し

¹ 同経の題名とその原語については、桜部 [1969], 堀 [2012] 参照。

² 同経は集成経典であるとしても、漢訳をみる限り、各経典の構成は体系的・組織的であり、単独経典としての体裁を備えている。すなわち、各々の単独経典の序分と流通分は切り離し、正宗分のみをそのまま、あるいは部分的に書き換えて編纂し、単一の経典として構成しなおしている。その結果として『六十華嚴』は七処八会(七つの場所で八回の説法)であり、『八十華嚴』は七処九会であるとされ、説法の場所は地上の寂滅道場・普光法堂から、天上の切利天宮・夜摩天宮・兜率天宮・他化天宮へ、再び地上の普光法堂・逝多園林へと次々とかわっていくよう構成されている。同経の構成および集成意図については、伊藤 [1983: 45–77] 参照。

³ 『華嚴経』のサンスクリット断片については、Hori [2012], 堀 [2013] 参照。

⁴ 船山 [2013: 82–85]によれば、『六十華嚴』の「十地品」は鳩摩羅什訳『十住経』を参照し、可能な限りそのまま使用している。「十地品」は『十住経』と同系統のテキストであり共通する部分が多いが、原文が異なる箇所もあるので、ブッダバドラ訳は、羅什訳を最大限に活用しつつ、最小限度の改訂を施す形で自らの訳文を作成したのであるという。

⁵ 「如来華嚴品」については、日野 [1954] 参照。

⁶ 「普賢所説品」については、小林 [1960] 参照。

て残した。この「慈恩華嚴」が『六十華嚴』訳出の際に用いられた原典と考える研究者もいるが、他の諸研究では「慈恩華嚴」は『六十華嚴』の原典と同一系統に属するもの、あるいは『六十華嚴』の原典より後代のものと見なされている⁷。

翻訳三本および「慈恩華嚴」の全体的な構成を比較すると、同経の発展・増広過程で新たに編入された諸章以外、二つの箇所章立ての顕著な相違が見出される。第一に、『六十華嚴』の「盧舍那仏品」一章が、「慈恩華嚴」では九章立て、『八十華嚴』では五章立て、『藏訳華嚴』では九章立てに細分化されている。第二に、翻訳三本では一章となっている「入法界品」（『藏訳華嚴』の「荃莊嚴品」）が、「慈恩華嚴」では三章に分けられている⁸。

本稿では前者、すなわち、「盧遮那仏品」の章立ての相違について考察する⁹。『八十華嚴』の注釈書である慧苑（673-743）の『統華嚴略疏刊定記』（以下『刊定記』）は、『八十華嚴』のサンスクリット原典では本来九章立てであったものを、翻訳者が五章立てに再構成したことを伝えている。従来の研究では『刊定記』が顧みられることはなかったが、この記録に従えば、『六十華嚴』以外、「慈恩華嚴」・『八十華嚴』のサンスクリット原典・『藏訳華嚴』の章立ては完全に一致することになる。すると、残された問題は、現存する漢訳『六十華嚴』の「盧遮那仏品」が九章に細分化されていない理由であろう。これについては、二つの可能性が考えられる。すなわち、『六十華嚴』のサンスクリット原典でも九章立てであったものを、翻訳者のブッダバドラが一章にまとめた可能性である。あるいは、「盧遮那仏品」はそもそもサンスクリット原典では細分化されていない単一の章であり、ブッダバドラ訳の『六十華嚴』は、その本来の構成を忠実に伝えている可能性である。

本稿では、これまで考察されてこなかった『刊定記』に基づいて『八十華嚴』のサンスクリット原典の章立てについて検討したのち、『六十華嚴』と「慈恩華嚴」の関係を概観し、『六十華嚴』の章立てについて考察する。

2 諸本『華嚴経』『寂滅道場会』の章立ての相違

諸本『華嚴経』『寂滅道場会』の章立てを比較対照すると、以下のとおりである¹⁰。

⁷ 日野[1955]は、「慈恩華嚴」が頌の数や章題、「十定品」がないことなど、『六十華嚴』と合致する点が多いことから、「慈恩華嚴」を『六十華嚴』訳出の際に用いられた原典と見なしている。一方、翻訳三本および「慈恩華嚴」の全体的な構成を比較した木村[1984: 213-217]および伊藤[1988: 3-11]は、内容的な増広・発展の過程からいえば「慈恩華嚴」の成立は『六十華嚴』の原典の成立以降と見なしている。他の先行研究については、3.2を参照。

⁸ これら三章の題名は、注22参照。本稿では便宜上「慈恩華嚴」のこれら三章をまとめて、「入法界品」と呼ぶことにする。

⁹ 先行研究において、この相違点に関する議論は推測の域にとどまり、再考の余地が残されている。「慈恩華嚴」を『六十華嚴』の原典と同定した日野[1955]は、「慈恩華嚴」の章立てを『六十華嚴』の翻訳者のブッダバドラが改訂したと主張し、さらに第一の箇所において「慈恩華嚴」と『藏訳華嚴』の章立てが一致し、章題もだいたい一致することだけに基づいて、『八十華嚴』の原典でも九章立てであったが、翻訳者のシクシャーナンダが章立てを改訂したのではないかと推定した。そして、木村[1984: 216-217]は、第一の箇所において「慈恩華嚴」と『藏訳華嚴』とのみが章立てが一致することなどに基づいて、『藏訳華嚴』は遡れば「慈恩華嚴」に合流するのではないかと推定し、内容的な増広・発展の過程からいえば、『六十華嚴』→「慈恩華嚴」→『八十華嚴』→『藏訳華嚴』の順であると考えられるが、実際の原典の成立の時間的順序としては、『六十華嚴』→『八十華嚴』→「慈恩華嚴」→『藏訳華嚴』になる可能性なども在すると述べている。

¹⁰ 翻訳三本および「慈恩華嚴」の全体的な構成の比較対照は、既に木村[1984: 213-217]および伊藤[1988: 3-11]によってなされている。本章はその成果を踏まえながら新たに慧苑の『刊定記』の記

『六十華嚴』の章立てに関する考察

諸本『華嚴経』『寂滅道場会』の章立て対照表（括弧内の数字は「章番号」）

	『六十華嚴』	『八十華嚴』	『蔵訳華嚴』 ¹¹	「慈恩華嚴」（目録のみ）
寂滅道場会	(1) 世間淨眼品	< 1 > 世主妙嚴品	≪ 1 ≫ 一切世主妙嚴出現品	1) 世間淨眼品
	(2) 盧舍那仏品	< 2 > 如来現相品	≪ 2 ≫ 如来品	2) 如来品
		< 3 > 普賢三昧品	≪ 3 ≫ 普賢三昧神变出現品	3) 普賢菩薩修行入三摩提品
		< 4 > 世界成就品	≪ 4 ≫ 世界海説淨方成就品	4) 説入世界海品
		< 5 > 華藏世界品	≪ 5 ≫ 蓮華藏莊嚴世界海清淨功德海照明品	5) 淨世界海功德海光明品
			≪ 6 ≫ 世界海輪囷莊嚴海説品	6) 世界輪囷莊嚴海品
			≪ 7 ≫ 世界海地莊嚴説品	7) 説世界海莊嚴地品
			≪ 8 ≫ 国土性処説品	8) 觀世界性処品
< 6 > 毘盧遮那品	≪ 9 ≫ 世界性安住説品	9) 觀世界処安住音声品		
	≪ 10 ≫ 毘盧舍那品	10) 毘盧舍那品		

『華嚴経』の第一会の「寂滅道場会」は、『六十華嚴』では二章立て、『八十華嚴』では六章立て、『蔵訳華嚴』と「慈恩華嚴」では十章立てになっている。この相違は、『六十華嚴』では単一の章として扱われている(2)「盧舍那仏品」が他本では細分化されていることによる。

『六十華嚴』の(2)「盧舍那仏品」は、『八十華嚴』では< 2 >「如来現相品」、< 3 >「普賢三昧品」、< 4 >「世界成就品」、< 5 >「華藏世界品」、< 6 >「毘盧遮那品」の五章に分けられている。さらに、『蔵訳華嚴』と「慈恩華嚴」では『八十華嚴』の< 5 >「華藏世界品」が五章に細分化され¹²、全体は九章立てになっている。この『八十華嚴』の「華藏世界品」について、『刊定記』という注釈が重要な記録を残している。

中国華嚴宗第三祖の法蔵(643-712)は晩年に『八十華嚴』の注釈書である「華嚴略疏」の撰述に着手したが、未完のまま示寂した。それを弟子の慧苑(673-743)が引き継ぎ、

述を加えて考察したものである。

¹¹ 『蔵訳華嚴』の章題は、『影印・北京版 西蔵大蔵経 総目録・索引』p.107による。

¹² 伊藤[1983: 51]は、『八十華嚴』の< 5 >「華藏世界品」と『蔵訳華嚴』の≪ 5 ≫～≪ 9 ≫章とを比較すると、全く増補の箇所は見られず、むしろ説相においては『蔵訳華嚴』が『八十華嚴』よりも古形を示しているという。

完成させたのが『続華嚴略疏刊定記』である¹³。慧苑は『刊定記』において「再勘梵本」という方法を用いて、『八十華嚴』のサンスクリット原典を校勘しながら、漢訳の過程において省略された箇所、翻訳の誤りなどを詳細に記している¹⁴。

慧苑は『刊定記』巻三において、『八十華嚴』の<5>「華嚴世界品」（前頁の対照表参照）は、サンスクリット原典では五章に分けられており、それら五章のうち初めの章は「本品」であり、残りの四章は「子品」と述べている¹⁵。慧苑の記録によれば、「華嚴世界品」という章題はそれら五章のうち初めの章、すなわち、慧苑のいう「本品」の題名に相当する。慧苑はその「華嚴世界品」のサンスクリット原題を漢字の音写で記しており、残りの四章（子品）についてもサンスクリット原題を訳して記している¹⁶。『蔵訳華嚴』などの章題との対応は、今後、詳細に検討する必要があるが、少なくとも『八十華嚴』のサンスクリット原典において、「寂滅道場会」が十章で構成されていたことは確かであり、翻訳者のシクシャーナンダが漢訳の過程で章立てを改訂したことが確認される。

このように、『刊定記』によれば、『八十華嚴』のサンスクリット原典では本来、『六十華嚴』の「盧舎那仏品」に相当する箇所は九章になっていた。これは「慈恩華嚴」・『蔵訳華嚴』とも一致する。

3 『六十華嚴』と「慈恩華嚴」の関係

ところで、『八十華嚴』のサンスクリット原典では本来九章立てであったものを、漢訳者が五章立てに編集しなおしてしまった例があるので、『六十華嚴』の場合も原典では九章立てであったものを、漢訳者が直してしまった可能性も否定できない。また、智儼が記録を残した「慈恩華嚴」が『六十華嚴』訳出の際に用いられたサンスクリット原典であるとする研究者もいる。「慈恩華嚴」自体が『六十華嚴』の原典であるとする、『六十華嚴』の漢訳者のブツダバドラが原典では九章立てであったものを、一章に再構成したことになる。しかし、「慈恩華嚴」が『六十華嚴』訳出の際に用いられた原典であると確実に言えるのかどうか、この点については、まだ再考の余地がある。以下、その点を考察する。

3.1 『六十華嚴』の訳出事情

『六十華嚴』は、支法領がコートンから入手した三万六千頌のサンスクリット原典を418年3月から421年12月までの間に、天竺僧・ブツダバドラ（359-429）などが訳出したとされる¹⁷。その後、およそ260年が経過した680年に、ディヴァーカーラ Divākara（地婆訶

¹³ 坂本 [1956: 18-21], 李 [2000: 86-89] 参照。

¹⁴ 李 [2000: 120-149] は『刊定記』に記されている『八十華嚴』のサンスクリット原典の内容と、それに対応する『八十華嚴』の箇所を比較している。

¹⁵ 「華嚴世界品第五」將積此品，四門同前。初積名者。梵本於此品中□□五品初一是本品，後四是子品。（新纂統藏3, 627c7-9）

¹⁶ 新纂統藏3, 627c9-628a3。慧苑が記している五章の題名は、①「華嚴莊嚴具世界海之遍清淨功德海光明品」、②「說華嚴莊嚴世界海輪圍莊嚴品」、③「說世界海大地上莊嚴品」、④「說刹種安立品」、⑤「說世界安立品」である。慧苑はこれらのうち、①のサンスクリット原題だけを「拘蘇摩多羅驃訶阿楞伽嚕迦超三牟達羅鉢履輪入呼陀懼囊三牟達羅阿縛婆上呼婆」と、漢字の音写で残している。

¹⁷ 『出三藏記集』「出経後記」（大正55, 61a）。これ以外にも『六十華嚴』の訳出に関する資料は『出三藏記集』「仏大跋陀伝」（大正55, 104a19-24）、『高僧伝』「仏駄跋陀羅伝」（大正50, 335c3-11）、『六十華嚴』「後記」（大正9, 788b3-9）などがある。しかし、それらの資料の内容が完全に一致する

羅, 日照, 613–688) と法蔵などは, 「入法界品」のみのサンスクリット原典と『六十華嚴』の「入法界品」とを校勘して訳補を行った¹⁸. 訳補された箇所は, 以下の二箇所である.

- ① 摩耶夫人以後, 弥勒菩薩以前の「十人の善知識」の箇所 (大正 9, 765a3–767b28)
- ② 弥勒菩薩以降, 普賢菩薩以前の「文殊師利が右手を百十由旬のぼして善財の頂を按した」の箇所 (大正 9, 783b28–c15)

法蔵の師である智儼が, 訳補以前の『六十華嚴』に注釈した『捜玄記』にも, ①と②に対する注釈がなく, 「入法界品」の善知識の数を四十五人¹⁹とすることからも, 訳補以前の『六十華嚴』の「入法界品」には, ①と②が欠けていたことが分かる²⁰.

以上の「入法界品」の二箇所について訳補を行って完成したのが, 現存する『六十華嚴』, 三十四章の構成である.

3.2 「慈恩華嚴」について

智儼 (602–668) は, 『孔目章』の最後に「梵本同異義」という章を立て, 当時大慈恩寺に所蔵されていた「慈恩華嚴」を調査し, 頌の数やサンスクリットから訳した章題・「入法界品」の善知識名などを記している²¹. それによれば「慈恩華嚴」は, 41980 頌 + 10 字

わけではない. その相違および『六十華嚴』の訳出経緯の詳細は, 石井 [1964: 44–50], 木村 [1977: 21–26], 岡本 [2001: 60–67] 参照.

¹⁸ 法蔵は『探玄記』巻一において, 「ディヴァーカラなどと共に「入法界品」一章のサンスクリット原典と『六十華嚴』の「入法界品」とを校勘して, ①を訳補した」(大正 35, 122c22–27) と述べている. また『探玄記』巻二十二においては, 「①はブツバドラが省略したのである. [当時伝わっていた] 天竺諸本・崑崙本・于闐別行本のすべてに①があった。」(大正 35, 484c9–15) というが, 「慈恩華嚴」にも①がないことから (3.2 参照), 『六十華嚴』のサンスクリット原典では①が欠けていたことは確かであろう. ディヴァーカラ訳『大方広仏華嚴經入法界品』一卷 (大正 No. 295) は, ①のみの翻訳である. 既に①が欠けていた『六十華嚴』が流行したので, ディヴァーカラと法蔵は, ①のみの翻訳を別行したのであろう. 次に, ②の訳補について法蔵は『探玄記』巻二十に, 「サンスクリット原典と校勘し, 十七行の欠文を訳補した」(大正 35, 490b4–5) と簡単に述べているが, 慧苑は『刊定記』巻一において「大唐永隆元年, 中天竺三藏地婆訶羅, 此云日照, 於西京大原寺, 訳出入法界品内両處脱文. 一從摩耶夫人後, 至弥勒菩薩前, 中間脱天主光等十善知識. 二從弥勒菩薩後, 至普賢菩薩前, 中間脱文殊師利申手過百一十由旬按善財頂等半紙余文. 大徳道成律師, 薄塵法師, 大乘基法師潤色, 依六十卷本為定。」(新纂統蔵 3, 593c16–22) と, ①と②の欠文の箇所をともに記している.

¹⁹ 『捜玄記』巻五上 (大正 35, 90b7–11), 『孔目章』巻四 (大正 45, 584b8–13). 「入法界品」において善財童子が訪ねる善知識は, 人数としては文殊菩薩から普賢菩薩まですべて五十四人である. しかし, 文殊菩薩は二回現れるので, これを二人と数えたり, また徳生童子と有徳童女とは二人で同一の教えを説くので, この二人を一人と数えたりして, 善知識の数は場合によって五十三, 五十四, 五十五などといわれている. 本稿では, 二回現れる文殊菩薩を二人の善知識と数えた智儼の数え方と, 徳生童子と有徳童女とを二人と数えた慧苑の数え方とを合わせて, 五十五人を採用する.

²⁰ 『八十華嚴』はコータンからもたらされた四万五千頌のサンスクリット原典をシクシャーナンダ (652–710) が 695 年 3 月から 699 年 10 月までの間に訳出したとされる (則天武后の『八十華嚴』「序文」(大正 10, 1a6–1b19), 法蔵の『華嚴經伝記』巻一 (大正 51, 155a10–19)). 『八十華嚴』の「入法界品」には, ①は存在したものの, ②がまた欠けていたので, 法蔵が②の欠文を補った (『刊定記』巻一 (新纂統蔵 3, 594a4–15)). すなわち, コータンからもたらされた『六十華嚴』と『八十華嚴』のサンスクリット原典には共通に, ②が欠けていた. この事実を顧みれば, 当時コータンにあった『華嚴經』の原典には, ②が存在しないのが普通であったかもしれない. 『蔵訳華嚴』の原典の伝来経緯については未詳であるが, 『蔵訳華嚴』の「荃莊嚴品」には, ①と②すべて存在する.

²¹ 大正 45, 588a13–589b13.

(一頌は三十二字)、四十四章であり、翻訳三本では一章となっている「入法界品」(『藏訳華嚴』の「荃莊嚴品」)が、三章に分けられているが目立つ²²。また、前節でみた『六十華嚴』のサンスクリット原典の二箇所欠文のうち、①摩耶夫人以後、弥勒菩薩以前の「十人の善知識」の箇所が欠けていることが確認される²³。しかし、②が欠けていたかどうかは、智儼の記録だけでは確認できない²⁴。

「慈恩華嚴」について初めて詳細な考察をしたのは、日野 [1955] である。日野氏は「慈恩華嚴」が頌の数(後述)や章題、「十定品」がないことなど、『六十華嚴』と合致する点が多いことから、「慈恩華嚴」を『六十華嚴』訳出の際に用いられたサンスクリット原典と同定し、四十四章からなるこの原典を、翻訳者のブッダパドドラが章立てを改訂し、三十四章の『六十華嚴』として訳出したと結論づけた。一方、真田 [1959: 47-51] は、大慈恩寺は玄奘と因縁の深い寺であることから「慈恩華嚴」は玄奘将来の原典である可能性を指摘しており、「慈恩華嚴」がコートンからもたらされた『六十華嚴』の原典と同様に、「入法界品」の「十人の善知識」の箇所が欠けていることから、『六十華嚴』の原典と「慈恩華嚴」とは同一系のコートン本ではないかと推定している。また、『華嚴経』の翻訳三本および「慈恩華嚴」の全体的な構成を比較・考察した木村 [1984: 213-217] と伊藤 [1988: 4-10] は、内容的な増広・発展の過程からいえば「慈恩華嚴」の成立は『六十華嚴』の原典の成立以降と見なしている。そして、HAMAR [2007: 151] は「慈恩華嚴」の頌の数が『六十華嚴』のサンスクリット原典に近いことを指摘し、「慈恩華嚴」は『六十華嚴』訳出の際に用いられた原典、あるいは、そのコピー本である可能性も考えられるが、両者の章立ての相違のみならず場所や年代的問題があるので、そういう可能性は低いと述べている。

以上のように、日野 [1955] 以外に「慈恩華嚴」を『六十華嚴』訳出の際に用いられた原

²² 智儼の目録に記されている三章は「善財離貪藏品」「彌勒離貪名善財所問品」「説如来功德不思議境界上境界入品」である。しかし、日野 [1955: 257-260] はこれら三章の記録は智儼の誤りで、もともとは「善財離貪藏品」「彌勒離貪品」「普賢離貪品」という三章であり、智儼が記している「説如来功德不思議境界上境界入品」は、「普賢離貪品」の最後に続けて書かれていた他の単独經典であると推定している。

²³ 3.1 で述べたように、智儼は『搜玄記』巻五上(大正 35, 90b7-11)と『孔目章』巻四(大正 45, 584b8-13)において、訳補以前の『六十華嚴』の「入法界品」の善知識の数を「四十五人」とするが、『孔目章』の「梵本同異義」において智儼が記している「慈恩華嚴」の善知識は「四十六人」である。しかし、この「四十五人」と「四十六人」という相違は、ただ「天主光童女」の数え方に由来し、『六十華嚴』の原典と「慈恩華嚴」に欠けていた箇所は同一であると考えられる。「天主光童女」の箇所は、680年『六十華嚴』の「入法界品」に訳補された箇所であり、訳補された箇所には「於此世界三十三天、有王名正念王、有童女名天主光。」(大正 9, 765a4-6)とある。しかし、訳補以前の『六十華嚴』に注釈した『搜玄記』巻五には、「若爾前正念天及女寄是妙法智身云何。」(大正 35, 103b7-9)とあり、「天主光童女」を説明する箇所こそあるが、「天主光童女」という名称は出ていない。すなわち、訳補以前の『六十華嚴』の「入法界品」には「天主光童女」の箇所全体が欠けていたのではなく、「天主光童女」という名称以降の箇所が欠けていたと推定される。智儼はこれを一人の善知識と数えなかったので、『搜玄記』および『孔目章』巻四(大正 45, 584b8-13)では善知識の数を「四十五人」としたのである。一方、智儼は『孔目章』の「梵本同異義」においては「慈恩華嚴」の第四十三番目の善知識として「有天名正念、彼天有女。」(大正 45, 589b10-11)を記している。ここでも「天主光童女」という名称こそ出ていないが、智儼はこれを一人の善知識と数えて記したのである。

²⁴ 『六十華嚴』と『八十華嚴』のサンスクリット原典に共通に②が欠けていたこと(注 20 参照)、そして、「慈恩華嚴」が『六十華嚴』の原典と同じく①が欠けていたことを考えあわせれば、「慈恩華嚴」にも②が欠けていた可能性が高い。

『六十華嚴』の章立てに関する考察

典と考える研究者はいない。では、なぜ日野氏は「慈恩華嚴」を『六十華嚴』の原典と同定したのであろうか。以下、日野氏の主張を再考する。

日野氏が「慈恩華嚴」を『六十華嚴』の原典と同定した根拠をまとめると、次のとおりである。

- ①『八十華嚴』と『蔵訳華嚴』には「十定品」があるが、『六十華嚴』と「慈恩華嚴」にはない。
- ②『六十華嚴』と『八十華嚴』の章題のうち、特に相違するのが『六十華嚴』の「世間淨眼品」「宝王如来性起品」と『八十華嚴』の「世主妙嚴品」「如来出現品」という二章であるが、「慈恩華嚴」の「世間淨眼品」「説如来性起品」は『六十華嚴』と一致し、『蔵訳華嚴』の「一切世主妙嚴出現品」「如来出現説品」は『八十華嚴』と相応する。
- ③「慈恩華嚴」が、41980 頌 + 10 字というのは、智儼の計算の誤りであり、計算し直せば、38546 頌 + 8 字である²⁵。これは三万六千頌の『六十華嚴』のサンスクリット原典と矛盾しない（『八十華嚴』のサンスクリット原典は四万五千頌）。
- ④智儼の時代まで『六十華嚴』の原典以外、他の原典が伝来した記録はない。
- ⑤『六十華嚴』の原典に欠けていた摩耶夫人以後、弥勒菩薩以前の「十人の善知識」の箇所が「慈恩華嚴」にも欠けている。

日野氏も述べているように、『六十華嚴』が訳出された 421 年から、大慈恩寺が創建された 648 年までは、227 年を経過している。そのため、「慈恩華嚴」を『六十華嚴』訳出の際に用いられた原典と認めることはためらわれる。それにも関わらず、日野氏が「慈恩華嚴」を『六十華嚴』の原典と同定した決定的な根拠は、④と⑤であろう。①②③は、少なくとも「十定品」がないこと、第一章の題名が「世間淨眼品」であること²⁶において「慈恩華嚴」が『六十華嚴』の原典の系統に属することを証明するだけであり、「慈恩華嚴」を『六十華嚴』訳出の際に用いられた原典と同定する根拠にはならない。さらに、②に関して、『六十華嚴』の「宝王如来性起品」と「慈恩華嚴」の「説如来性起品」という章題が完全に一致するわけでもなく、ことに「如来性起」という訳は、『六十華嚴』の翻訳者のブツバドドラによって教義上の解釈が加えられている可能性が指摘されている²⁷。そのた

²⁵ 『孔目章』卷四「梵本同異義」には、「慈恩華嚴」は紙本で 541 紙、一紙二十行、一行約五十五字であって、一紙背面 2280 字、一頌三十二字として計算すると 41980 頌に 10 字を余すと記されている（大正 45, 588a14-20）。しかし、まず、一紙二十行に「一行約五十五字」を計算すれば、一紙背面 2200 字であり、2280 字にはならない。一行約五十七字が正しい。澄観は『華嚴七処九会頌釈章』において「慈恩華嚴」について智儼の『孔目章』を引用しているが、そこには、「五十七字以為一行」（大正 36, 710c22-711a1）とある。次に、一紙背面 2280 字 × 541 紙は 1233480 字であり、一頌が三十二字であるから、1233480 を三十二に分けると 38546 頌に 8 字を余すのである。すなわち、日野氏が言うように、41980 頌 + 10 字というのは智儼の計算の誤りである。澄観の記述は「五十七字以為一行」以外は、智儼の記述と同一。

²⁶ 木村 [1992: 8-9] は、『華嚴経』の第一章の題名に関しては、「世間淨眼」と「世主妙嚴」の二系統があり、四本の中では、『六十華嚴』と「慈恩華嚴」が前者に、『八十華嚴』と『蔵訳華嚴』が後者に属するという。

²⁷ 高崎 [1960] 参照。

め、智儼が『六十華嚴』の章題を参考にして訳した可能性も否定できない。

一方、④については、確かに智儼が「慈恩華嚴」を調査したと推定される 648-668 年頃²⁸まで、支法領がコートンから入手した『六十華嚴』のサンスクリット原典以外、他の原典が伝来した記録はない。しかし、法蔵は『探玄記』巻一に「近ごろ大慈恩寺の塔の上をみると、『華嚴経』のサンスクリット原典が三本あり、それらは『六十華嚴』と大同し、頌の数も相似する²⁹と述べている。法蔵がこれら三本の原典をみたのは 695-699 年頃と推定される³⁰。この法蔵の記述について日野氏は、「智儼がサンスクリット原典の数については述べていないので、当時の大慈恩寺には「慈恩華嚴」一本だけがあって、それから法蔵が三本の原典をみた 695-699 年頃までの間、大慈恩寺にさらに二本の原典が増えた」と解釈している。しかし、こうした変化を裏づける資料はなく、智儼が「慈恩華嚴」を調査した当時、既に大慈恩寺には三本の原典があり、智儼はそれらのうち「慈恩華嚴」一本だけを調査した可能性も否定できない。

次に、⑤のように「慈恩華嚴」が『六十華嚴』のサンスクリット原典と同じく、「入法界品」の「十人の善知識」の箇所が欠けているのは確かである³¹。しかし、日野氏は検討していないが、『六十華嚴』の善知識名と智儼が訳した「慈恩華嚴」の善知識名とを比較検討した場合、例えば、第十四番目の善知識は『六十華嚴』では「海住城の自在優婆夷」³²、「慈恩華嚴」では「大体城の電住長者」³³（『八十華嚴』では「海住城の具足優婆夷」³⁴）であり、第十五番目の善知識は『六十華嚴』では「大興城の甘露頂長者」³⁵、「慈恩華嚴」では「師子滿城の甘露法頂長者」³⁶（『八十華嚴』では「大興城の明智居士」³⁷）であり、『六十華嚴』と「慈恩華嚴」とが完全に一致するわけではない。もちろん、これはブツダバドラや智儼の訳の誤りなどによるのかもしれないが、実際に『六十華嚴』の原典と「慈恩華嚴」とが異なっていたと考えることも不可能ではない。すなわち『六十華嚴』のサンスクリット原典と「慈恩華嚴」は、「入法界品」の「十人の善知識」の箇所が欠けているという点で、単に同一の系統に属していると考えられることも可能である。同じ箇所が欠けていたとしても、それが「慈恩華嚴」自体を『六十華嚴』の原典そのものと同定する根拠にはならない。

以上、日野説を検証したが、そこで挙げられている根拠は「慈恩華嚴」を『六十華嚴』

²⁸ 『孔目章』の撰述がいつ始まったかは明らかでないが、その完成は 663 年以降とされる（木村 [1977: 405]）。そして、大慈恩寺の創建が 648 年（貞観二十二）であり、智儼の入寂が 668 年であるので、智儼が「慈恩華嚴」を調査した時期を 648 年から 668 年までの間と大まかに算定した。

²⁹ 大正 35, 122b23-25。法蔵はこれら三本のサンスクリット原典が伝来した経緯や「慈恩華嚴」については、一言も述べていないが、それら三本のうち一本は、智儼が調査した「慈恩華嚴」に間違いのないだろう。

³⁰ 『探玄記』巻一には、法蔵が大慈恩寺の三本のサンスクリット原典をみたことと共に、当時『八十華嚴』の訳出中であることが述べられている（大正 35, 123a5-11）。すなわち、法蔵が大慈恩寺にある三本の原典をみたのは、『八十華嚴』が訳出された 695-699 年頃と推定される。

³¹ 注 23 参照。

³² 大正 9, 705a18-19。

³³ 大正 45, 589a10。

³⁴ 大正 10, 351a28。

³⁵ 大正 9, 705c24。

³⁶ 大正 45, 589a11。

³⁷ 大正 10, 352b20-21。

の訳出の際に用いられた原典と同定し得るものではない。特に「慈恩華嚴」の調査時期は『六十華嚴』の訳出時期からおよそ二百年以上も経過しており、この年代の幅は、看過できない問題である。以上の諸問題を踏まえると、智儼の記録にもとづいて確実にいえるのは、「慈恩華嚴」は、第一章の題名が「世間淨眼品」であること、「十定品」がないこと、「入法界品」の「十人の善知識」の箇所が欠けているという点で、『六十華嚴』の原典の系統に近いということである。

4 『華嚴經』のサンスクリット写本断片に伝わる章番号

前節で検討したように、「慈恩華嚴」を『六十華嚴』の原典と見なすことが難しいとしても、『六十華嚴』の「盧遮那仏品」がサンスクリット原典では『藏訳華嚴』などのように九章立てであった可能性は残されている。実際に漢訳『八十華嚴』は翻訳者のシクシャナンダによって本来九章立てであったものが五章に再構成されている。したがって、『六十華嚴』の場合も漢訳者による章立ての編集ということも考慮しなければならない。

ところで、『華嚴經』のサンスクリット写本断片には章番号が記されているものがある。すなわち、MIRONOV [1914: 332] および松田 [1988: 18-19] によって報告されている「普賢行説品」の写本断片³⁸に記されている章番号は、「盧遮那仏品」が九章立てであったと仮定すると、整合性がない。

この「普賢行説品」の断片は、『六十華嚴』の第三十一章、「慈恩華嚴」の第三十九章、『八十華嚴』の第三十六章（サンスクリット原典の章立てとしては、第四十章）、『藏訳華嚴』の第四十二章に相当する。これは、一葉のみの断片で、表には九行、裏は五行が書かれている。この断片のコロフォンには「普賢行説品」の章番号が記されているが、松田氏が指摘しているように、他本とは全く異なり、『六十華嚴』の章番号とほぼ一致する³⁹。

buddhāvataṃsake mahāvaiṣṭyāsūtre śatasahasrike granthe samantabhadracaryānirdeśa-parivartto nāma triṃśatimaḥ samāptaḥ //31//⁴⁰（十万頌からなる『大方広仏華嚴經』のうち、「普賢行説品」と名づける第三十〔章〕が終わった//31//）

下線で示したように、この断片のコロフォンには「第三十」 triṃśatimaḥ とありながら、数字で「31」とも書かれているので、どちらが正しいのかは判断できない。数字の「31」が正しいならば、『六十華嚴』の章番号と完全に一致するが、サンスクリットで書かれている「第三十」が正しいなら、現存『六十華嚴』とは若干章立ての異なる他の原典が存在したことになる。

³⁸ Mironov・松田両氏によれば、この断片はグライラマ十三世がロシアに寄贈したサンスクリット写本の中に含まれているものであり、ネパール紙にネパール系貝葉本に見られるような古い書体で書かれているネパール系写本である。この断片は、『六十華嚴』の「普賢菩薩行品」、「慈恩華嚴」の「説普賢菩薩行品」、『八十華嚴』の「普賢行品」、『藏訳華嚴』の「普賢行説品」に相当するが、便宜上「普賢行説品」とまとめて呼ぶことにする。

³⁹ 松田 [1988: 19] は、ネパール系写本はチベット語訳と一致することが多いが、この断片が翻訳の一番古い『六十華嚴』に対応することは異例であると述べている。

⁴⁰ MIRONOV [1914: 332], 松田 [1988: 18].

5 『華嚴經』のチベット語異訳（部分訳）に記されている章番号

これまでの研究で言及されたことはなかったが、『華嚴經』「仏不思議法品」のチベット語異訳（部分訳）⁴¹に記されている章番号も、現存『六十華嚴』とほぼ一致する。

この「仏不思議法品」のチベット語異訳（北京版 No.854）は、『六十華嚴』の第二十八章、「慈恩華嚴」の第三十六章、『八十華嚴』の第三十三章（サンスクリット原典の章立てとしては、第三十七章）、『藏訳華嚴』の第三十九章に相当する。このチベット語異訳のコロフォンに記されている章番号は「第二十九」であり⁴²、諸本のいずれとも完全に一致するわけではないが、『六十華嚴』に最も近い。

『六十華嚴』と『八十華嚴』の間にみられる、顕著な相違の一つは「十定品」の有無である。すなわち、『八十華嚴』は第二十六章「十地品」（『六十華嚴』の第二十二章）の直後に新たに「十定品」が編入されている。もし、『六十華嚴』のサンスクリット原典において、第二十二章「十地品」の直後に「十定品」が編入されたとすれば、第二十八章だった「仏不思議法品」は「十定品」が増えることによって「第二十九」章となるはずである。ただし、この増広の過程を裏付ける資料はない。

以上のように、「仏不思議法品」のチベット語異訳の章番号は、先述の「普賢行説品」のサンスクリット写本断片の場合と同様に、「盧遮那仏品」を九章立てとする他本とはまったく異なり、『六十華嚴』とほぼ一致する。このことから、『六十華嚴』の「盧遮那仏品」の章立ては原典をそのまま反映している可能性が高いと考えられる。したがって、『六十華嚴』の「盧舍那仏品」はそもそも単一の章であり、九章立てではなかったことになる。

6 まとめ

以上、諸本『華嚴經』の章立ての相違を手がかりにして、『六十華嚴』の章立てについて考察した。その結果をまとめると、以下のとおりである。

①『六十華嚴』の「盧遮那仏品」という一章は、「慈恩華嚴」では九章、『八十華嚴』では五章、『藏訳華嚴』では九章に分けられている。しかし、慧苑の『刊定記』は『八十華嚴』のサンスクリット原典では本来九章立てであったものを、漢訳者が五章立てに再構成したことを伝えている。この記録に従えば、『六十華嚴』以外、「慈恩華嚴」・『八十華嚴』のサンスクリット原典・『藏訳華嚴』の章立ては一致することになる。

②「慈恩華嚴」を『六十華嚴』訳出の際に用いられた原典と同定した日野 [1955] は、『六十華嚴』の翻訳者のブッダバドラが章立てを改訂したと主張する。しかし「慈恩華嚴」を『六十華嚴』の原典と同定することは特に年代的な問題がある。智儼の記録にもとづいて確実にいえるのは、「慈恩華嚴」は第一章の題名が「世間浄眼品」であること、「十定品」がないこと、「入法界品」の「十人の善知識」の箇所が欠けているという点で、『六十華嚴』の原典の系統に近いということである。

⁴¹ このチベット語異訳（部分訳）は、『六十華嚴』の「仏不思議法品」、「慈恩華嚴」の「説仏法不思議品」、『八十華嚴』の「仏不思議法品」、『藏訳華嚴』の「不思議仏説法品」に相当するが、便宜上「仏不思議法品」とまとめて呼ぶことにする。

⁴² snyan gyi gong rgyan rgyan pa chen po'i mdo le'u 'bum pa las 'phags pa sangs rgyas kyi chos bsam gyis mi khyab pa bstan pa'i le'u nyi shu dgu pa rdzogs so//（北京版 Vol.34, Mu200b5-6）

『六十華嚴』の章立てに関する考察

③ 「普賢行説品」のサンスクリット写本断片と「仏不思議法品」のチベット語異訳（部分訳）に記されている章番号は、「盧遮那仏品」を九章立てとする他本とはまったく異なり、現存する漢訳『六十華嚴』の章番号とほぼ一致する。すなわち、『六十華嚴』のサンスクリット原典では「盧遮那仏品」は単一の章であり、漢訳『六十華嚴』の章立ては原典をそのまま反映している可能性が高いと考えられる。

〈略号および使用テキスト〉

『六十華嚴』 『大方広仏華嚴經』 大正 No.278

『八十華嚴』 『大方広仏華嚴經』 大正 No.279

『藏訳華嚴』 *Sangs rgyas phal po che shes bya ba shin tu rgyas pa chen po'i mdo* 北京版 No.761

「慈恩華嚴」 『孔目章』 卷四「梵本同異義」に記されている「大慈恩寺華嚴梵本」（目録のみ）

「仏不思議法品」のチベット語異訳（部分訳） *'phags pa sangs rgyas kyi chos bsam gyis mi khyab pa bstan pa* 北京版 No.854

『搜玄記』 『大方広仏華嚴經搜玄分齊通智方軌』 大正 No.1732

『孔目章』 『華嚴經内章門等雜孔目』 大正 No.1870

『刊定記』 『続華嚴略疏刊定記』 新纂統蔵 No.221

（参考文献）

石井 教道 [1964] 『華嚴教学成立史』 京都：平楽寺書店。

伊藤 瑞叡 [1983] 「華嚴經の成立—大本の構想内容と集成意図および十地經の位置」 『華嚴思想』 講座大乘仏教 3, 東京：春秋社, pp.45-77.

[1988] 『華嚴菩薩道の基礎的研究』 京都：平楽寺書店。

岡本 一平 [2001] 「仏跋陀羅の伝記研究—『華嚴經』 翻訳を中心に—」 『仏教学』 43, pp.51-73.

木村 清孝 [1977] 『初期中国華嚴思想の研究』 東京：春秋社。

[1984] 「華嚴經典の成立」 『東洋学術研究』 23-1 (106), pp.212-231.

[1992] 『中国華嚴思想史』 京都：平楽寺書店。

小林 實玄 [1960] 「華嚴經の組織に於ける普賢經典の位置—藏訳華嚴經「普賢所説品」に留意して—」 『印度学仏教学研究』 8-1 (15), pp.136-137.

坂本 幸男 [1956] 『華嚴教学の研究』 京都：平楽寺書店。

桜部 建 [1969] 「華嚴という語について」 『大谷学報』 49-1 (181), pp.26-34.

真田 有美 [1959] 「華嚴經の梵本に就て」 『仏教学研究』 16・17, pp.47-70(L).

高崎 直道 [1960] 「華嚴教学と如来蔵思想—インドにおける「性起」思想の展開—」 川田龍太郎監修, 中村元編集 『華嚴思想』 京都：法蔵館, pp.275-332.

日野 泰道 [1954] 「西藏訳華嚴經の第十一品」 『印度学仏教学研究』 3-1, pp.305-307.

[1955] 「智儼の伝へたる「大慈恩寺華嚴梵本」考」 『山口博士還暦記念：印度学仏教学論叢』 京都：法蔵館, pp.254-261.

- 船山 徹 [2013] 『仏典はどう漢訳されたのか—スートラが經典になるとき』 東京：岩波書店.
- 堀 伸一郎 [2012] 「『大方広仏華嚴經』一題名とその原語—」『論集 華嚴文化の潮流』ザグレート ブッタ・シンポジウム論集 10, 奈良：東大寺, pp.10–21.
- [2013] 「華嚴経原典への歴史—サンスクリット写本断片研究の意義」『智慧／世界／ことば—大乘仏典 I』シリーズ大乘仏教 4, 東京：春秋社, pp.183–211.
- 松田 和信 [1988] 「ダライラマ 13 世寄贈の一連のネパール系写本について—『瑜伽論』「撰決択分」梵文断簡発見記—」『日本西蔵学会々報』34, pp.16–20.
- 李 惠英 [2000] 『慧苑『続華嚴略疏刊定記』の基礎的研究』 東京：同朋舎.
- HAMAR, Imre [2007] “The History of the Buddhāvataṃsaka-sūtra: Shorter and Larger Texts”, Imre Hamar ed., *Reflecting Mirror: Perspectives on Huayan Buddhism*, ASIATISCHE FORSCHUNGEN15, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp.139–167.
- HORI, Shin'ichirō [2012] “Sanskrit Fragments of the Buddhāvataṃsaka from Central Asia”, Robert Gimello, Frédéric Girard and Imre Hamar eds., *Avataṃsaka Buddhism in East Asia: Huayan, Kegon, Flower Ornament Buddhism. Origins and Adaptation of a Visual Culture*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp.15–35.
- MIRONOV, N. D. [1914] *Catalogus codicum manu scriptorum Indicorum qui in Academiae Imperialis Scientiarum Petropolitanae Museo Asiatico asservantur*, Petropoli.

〈Keywords〉 六十華嚴, 盧舍那仏品, 慈恩華嚴, 八十華嚴, 刊定記

ぱく ひょんじん 東京大学大学院博士課程

A Study on the Chapter Divisions of the Sixty-fascicle *Huayan jing*:
Based on the Differences in Chapter Divisions
in Several Versions of the *Buddhāvataṃsaka-sūtra*

HyunJin PARK

Three translations of the large *Buddhāvataṃsaka-sūtra* have been passed down: the first Chinese translation, the sixty-fascicle *Huayan jing*, by Buddhahadra, was completed in 421 CE. The second Chinese translation, in eighty fascicles, by Śikṣānanda, was completed in 699 CE. The Tibetan version was translated by Ye shes sde and others in the ninth century CE. Besides these three translations, there is also a Sanskrit version recorded by Zhiyan(智儼, 602–668). Zhiyan investigated the Sanskrit manuscript of the *Buddhāvataṃsaka-sūtra* that was kept in the Dacien temple(大慈恩寺) at that time, and wrote down the titles of the chapters. While a researcher believe this Sanskrit manuscript was used as the original text for the sixty-fascicle translation of the *Huayan jing*, other studies indicate that this manuscript is a text belonging to the same tradition as the original Sanskrit text of the sixty-fascicle *Huayan jing*. If we compare the composition of the three translations of *Buddhāvataṃsaka-sūtra* and the list recorded by Zhiyan, there are significant differences in the chapter divisions of these four versions of *Buddhāvataṃsaka-sūtra*: The Vairocana Buddha Chapter(盧舍那佛品) of the sixty-fascicle *Huayan jing* is divided into five chapters in the eighty-fascicle version, whereas there are nine chapters in the Tibetan translation and the Sanskrit version. However, Huiyuan’s(慧苑, 673–743) *Kanding ji* (刊定記; a commentary on the eighty-fascicle *Huayan jing*), says “the Sanskrit original of the eighty-fascicle *Huayan jing* originally had nine separate chapters, but the eighty-fascicle *Huayan jing*’s translator divided these into five chapters.” If we accept this statement, the Sanskrit original of the eighty-fascicle *Huayan jing* and the Tibetan version will all be in full agreement, with only the sixty-fascicle *Huayan jing* differing. In this case, the reason for the difference in one version is likely the same reason that the Vairocana Buddha Chapter in the sixty-fascicle *Huayan jing* is not divided into nine chapters. Two possibilities can be considered to explain this problem. One possibility is that Buddhahadra(the translator of the sixty-fascicle *Huayan jing*) reduced the nine chapters of the original sixty-fascicle *Huayan jing* to one chapter based on the assumption that the Sanskrit original also had nine chapters. The other possibility is that The Vairocana Buddha Chapter may be a single, undivided chapter in the original Sanskrit version of the sixty-fascicle *Huayan jing*.

In this paper, I examine the chapter divisions of the original Sanskrit version of the eighty-fascicle *Huayan jing* based on Huiyuan’s *Kanding ji*, which has not been considered until now, and I explore the relationship between the sixty-fascicle *Huayan jing* and the Sanskrit version recorded by Zhiyan, while also considering the chapter divisions of the Vairocana Buddha from the sixty-fascicle *Huayan jing*.